

新井孝重著

『日本中世合戦史の研究』

東京堂出版 二〇一四・七刊

A5 四四八頁 八五〇〇円

著者は悪党研究、殊に東大寺領黒田荘の悪党（黒田悪党）の研究者として知られる。しかし著者の修論のテーマは南北朝内乱論だったという。二一世紀に入ってから、悪党論を踏まえつつも、研究の原点に回帰してきたようだ。本書はそれらの成果を集大成した、南北朝期を主とする中世合戦史の研究書である。

序章「中世軍勢力の構造」（新稿）は本書全体の主張を要約した内容になっている。西洋史との比較など興味深い知見が多いが、中世軍事史の研究史整理があるとお良かった。

第一部「中世武士の実像」は四章から成る。第一章「九州に渡った東国武士・佐々目氏」（初出一九九八年）は、西遷御家人佐々目氏の鎌倉〜南北朝期の所領支配・政治動向を明らかにしたものである。近年は東国御家人の遠隔地所領の経営方式に注目が集まっているが、本章はその先駆的業績の一つといえる。第四章「戦国土豪内田氏の系譜」（一九九八年）は、『武蔵藤原内田之系譜』を読み解いたもので、これも最近活況を呈している系図論の先駆を成すものだろう。

第二章「伊賀国地侍の一揆と自治」（二〇一三年）は貞和三年（一三四七）の伊賀国「悪党」による守護改替訴訟を「一国規模の一揆」

とみなし、他地域の国人一揆と比較している。第三章「内乱期高麗氏の厭戦意識」（新稿）では、南北朝内乱を経験した高麗行高が臨終に際して「武士の行い」を否定し、非戦の意志を子孫に訓戒したことを紹介、喜び勇んで戦場に向かったように語られがちな中世武士のもう一つの顔を浮き彫りにしている。このほか、第一部にはコラムが一本収録されている。

第二部「内乱期の宮方武士と宮たち」は三章と二本のコラムを収める。第一章「元弘以前の楠木正成」（二〇一一年）は、楠木正成が元亨二年（一三三三）に鎌倉幕府の命を受けて畿内近国の反幕勢力を討伐したという近世史料の記述に着目する。そして正成は得宗被官であり、六波羅探題指揮下の地頭御家人であったと説く。

第二章「黒血川以後の北畠顕家」（二〇〇九年）では、青野原合戦後の北畠顕家の足取りを復元する。黒血川を渡らず美濃垂井から伊勢国へ入った顕家は、北畠親房の勢力に守られて大和宇陀郡に入り、南大和の宮方勢力を糾合して奈良に進撃したという。

第三章「興良・常陸親王考」（二〇〇一年）は、護良親王の子息で、のちに後醍醐天皇の猶子となった興良親王の活動を論じたもの。観応の擾乱期に中国地方で盛んに令旨を發した常陸親王が興良と同一人物である可能性を示唆する。

第三部「合戦にみる軍事社会史」は三章と三つのコラム、二本の付論から構成される。第一章「元弘三年京都合戦」（二〇一三年）では、六波羅探題が頑強で護良親王が苦戦したこと、足利高氏の挙兵によって勝敗が決したことを主張する。第二章「悪党と宮の武力」（二〇〇三年）は、南朝の宮たちと悪党との結合という視角か

ら内乱を描いたもの。第三章「戦国期北武蔵の戦乱」（二〇〇七年）では、上杉・武田・北条という三大勢力の抗争の舞台となった秩父の情勢を叙述する。

昨今の中世史学界では戦争論が盛んだが、単著の論文集となると意外に少ない。本書を契機に、南北朝内乱の軍事史的研究が活性化することを望んでいる。

（呉座勇一）